



若者

寮生活をかえりみて

齋藤年史*

私は現在、大学に勤務しているが、以前一年余りの間、ある会社の名古屋製造所に勤めていたことがある。社会人としてその会社に勤めるまでずっと、自宅から通学していたので、名古屋の会社の寮に住むことに対し、大きな不安とかな期待とを抱いて、未知の寮生活に入った。

寮は会社から車で25分程の名古屋市内の住宅街にあり、その街の雰囲気や外観からは、とても寮とは思えない様相を呈していた。もちろん、〇〇会社〇〇寮というような野暮なネオンサインや壁面の大書はなく、ただ玄関に表札代わりに小さく寮の名が記されているだけである。十畳程の和室が24部屋と、その他に管理人室や食堂、浴室などあり、通常の独身寮と同じである。いわゆる独身寮と異なることは、この寮が新入社員の研修の為の寮であり、従って一年たてば、ほとんどの者が別の独身寮に移ることである。

この寮に、新入社員のうち私を含めて30人余りが入ることになった。また新入寮生の世話役として、寮の先輩が10名程残っていた。

入社式の前日に入寮せよとの通知を受け、わずかの手荷物を携えて昼すぎに寮の門をくぐった。自分の部屋に入り、同室の新入社員といくらか話はしたものの、明日の入社式の事で気が落ち着かない。入社式は東京で行われる為、朝6時までには寮を出なくてはならず、それまでの学生生活と起床時刻が大巾に異なることがとても心配であった。ところがその晩、食堂で入寮式が行われ、酒を浴びる程飲まされ、夜半過ぎまで大騒ぎした。頭がガンガンし、気持の興奮も手伝って、翌朝までほとんど眠れなかった。

頭痛と睡眠不足の体ではあったが、何としても出席しなくてはならない入社式である。誰が何を話されたかもほとんど覚えていず、ただ式の間、立っているのが辛かったことだけが、記憶に残っている。式後の会社役員との昼食会では、コップに注がれたビールを見ただけで胸が悪くなった。早く寮に戻って、ぐっすり寝たかった。

しかし、入社式の夜は昨夜にも増して盛大な宴が待ち受けていた。この入社祝賀会では、先輩がコップ酒の駆け付け三杯を手本として我々に強いた為、生理的拒否反応を示す者まで出てくる有様であった。丁度この頃新聞に、大学の寮やクラブで急性アルコール中毒死の起こったことがいくつか報じられ、他人事では無いゾ、とささやき合っていたものだった。

酒に弱い者にとっては地獄と感じられる寮の生活であるが、酒好きにとっては又とない嬉しい規則がある。四月中に限り、先輩を誘って寮生行き付けの飲み屋に行った場合、新入寮生の勘定はすべて只になるということである。この勘定は、寮にいる先輩が全員で分担することになっており、このために先輩諸兄の四月分の給料はほとんど飲み屋に消えたはずである。酒にまつわる話は色々あるが、他の会社の寮や大学のクラブの事を考えていただければ、私のいた寮の様子も察していただけるであろう。

ところで、会社の寮ではあまり一般的でないと思われるのが、部屋の扉に錠がないことである。これも最初から錠が付いていなかったのではないらしい。確かに扉には、錠を取り付けてあった跡が残っている。先輩の説明によると、以前、錠のかかっている部屋に泥酔した寮生が無理矢理押し入ろうとして扉をぶち壊したことがあり、扉が倒れると本人だけでなく部屋で寝ている者にも危険であるからと、その時にわざ

*齋藤年史 (Toshifumi SAITO), 大阪大学, 工学部, 応用物理学科, 第1講座, 助手, 工学修士, 計算機工学

と錠を取り外したということである。

部屋に錠がないため、毎年、新入寮生はいくつかの洗礼を受けなければならないことになっている。その一つは、疲れてぐっすり寝ている深夜、一時間おきに、先輩が代わる代わる酒を持って、新入寮生を起こして回ることである。ここで目を覚ませば酒を飲まねばならず、目を覚まさないか狸寝入りを決め込むと、布団ごと廊下に引きずり出されてしまう。どちらにしても、十分な休養などとても望めそうもない。

これ以上に驚かされるのが、夜中の寝静まった時に、部屋の中に爆竹を投げ込まれることである。これが決行された翌日からは、恐ろしくて寮では寝られず、深夜映画館で睡眠をとる者も出てくる始末であった。

このように書いてくると、何と恐ろしい寮と思われるであろう。しかし、この騒ぎも五月にはピタリと収まった。というのは、新入社員は四月中、講議中心のスケジュールであるが、五月に入れば工場実習が始まり、二日酔いや寝不足で事故につながると大変だという理由からである。

その後は寮生活も落ち着き、やっと人並の生活を送れるようになった。あれほど恐れていた先輩諸兄も、じっくり話をしてみると、人の面倒見が良く、繊細な神経の持ち主であったり、意外に気の弱い面を持っていることがわかり、急に親しみを感じることもあった。

ウィーク・デーには、マラソン大会、バス・ツアー、寮対抗の球技大会、それに、盆踊りや餅つきなど、年中行事となっている催し物が多かった。前日の夕食時に急に決まることもよくあった。これらウィーク・デーの行動には、寮生全員の参加が原則となっており、たとえ休日といえども、個人の自由な行動をとることは、かなり難しい状況にあった。このような寮生活は、常に良いとは言えないだろうが、入社して最初の一年程なら、経験しておくことも意義があると思われる。私のように、多人数の中で生活したことの無い者にとっては、特に貴重な経験であった。

大学時代なら、自分の属する場が大学と家庭

の両方にあり、例えば、大学での嫌な事から精神的に逃避するために、家庭にその場を求めることが出来た。その点では家庭は、一時的にしろ気持ちを休めることのできる所である。ところが、私の寮生活においては、逃げ場が無かったのである。常に会社に居るのと同じである。嫌な事があっても泣けず、どうにかして切り抜ける事を考えねばならない。一時も気を許せないという状態をはじめて経験した。

しかし、同じ屋根の下に生活し同じ体験をしてきたことが一種の絆となったのか、心細い、孤独なこの時間に、同じ寮内で、気の置けない友人を見い出せたことは幸せであった。周囲の者すべてが他人だという気持ちから解放され、少くとも私自身の意識のいくらかを感じてくれる者の存在を信じることにより、自己を意識する空間が急に大きくなったように思えた。

私が会社を辞め、大学に勤めるようになった現在でも、名古屋に行けば、寮に立ち寄りさせていただいている。寮には、今も懇意にしている友人や、当時の同寮生が残っており、しばし思い出に耽る。

最後に、寮の愛唱歌であり、私の大好きな、「古い顔（西条八十訳詞）」の一部を記して終りとしたい。

夜おそくまで すわりこみ
わらって飲んだ ものだった
あの仲よしの 飲み仲間
みんなみんな いまはない
ああなつかしい 古い顔

心知った 友達は
兄弟よりも なつかしい
おなじ家に なぜ君は
生まれて来ては くれなんだ
そうすりゃ今でも そばにいて
亡くなった友 去った友
うばわれた友 いろいろな
昔のことを かたろうに
みんなみんな 今はない
ああなつかしい 古い顔